



Handwritten text in Arabic script on a vertical paper strip, likely a title or author's name.

NO. 1748



物とあそ袖うらけらふ落とすことあり
修明此のうらけらふは是利此里を雲
影をみよひをけりし月をよき花なり
と仰しとてさるゆゑ也 風雅より名あり
人を知りしとてさるゆゑ也 嵐齋居士ハ
とて世をさる業を勅め修り安んじ文哉

雪の芭蕉翁此俳話此正風色一
古稀の歌ひをなすに松を
有る事一々をなすに松を
多岐をなすに常事風をなすに七十
六夜此歌をなすに西に空へをなすに
ありてひくはぬをなすにありぬに万幸を生
前此新書をいひしをなすに松をなすに

ありて男松をなすに女松をなすに
三回忘此此福をなすに小集を編む必ありて
梅見の法生此此又先をなすに
朋友を誹るに何れも居士此選をなすに
此費をなすに又此記此をなすに四時
人をも志すにむ聖納をなすに又交り

を思ひろ相あり考れいんんをあらんむ
まゝに書れ拙く成りてはるるは
袖をうしろひはるる

あ政二年七月

為誰尾由抄

伽諧雪明里

嵐斎居士遺稿

はた袴やゆりる物たまたまの巾
蓬葉やころもきくことの道とくは
とくまや縁多入り平他七の
むらさきふまぐ冒の阿る礼者か
万々の仕舞て廣く中まうた
むらさきのねねと成り福あり

水移りしそ落初るはくまはこつね
半日やゆつる中一ふくまめらにのせ
地りたまつるこつね影や梅の花
常々来さうけり影や休一のそり
まらひまのまらぬ声や川面
けしん理り家々るんえん猫の意
見通して啼くぬ衣や福よの妻
まら午や植木もよふ毎らん
鐘なりてくるる日影や由忘のうら

志しらくら尾そりゆきまらるの月
まらまらや磯を福よきりわねわり
待ぬ日や降や潮うらまの雪
淡雪やまらうけらる物料理
きたるこつねおや梅野らら
啼けお雉子のあくるる茶うら
藪入やまらうらにほを日つら
やうらや隣まらまら声
菜の花やわらてふらまか茂のあ

二
旅く婦くまそめく——福くん像
えく居れを宮くと多——新 能
加——法あるいふ中くくき 鐘の音
初ものうをそそ——一日く中けわ
見をそくこれ——真向やりらわ 橋
へくき——く後や 花少人をまひ
日くく——や 花中 旅く何く水の音
よのつふく其く約束乃 橋 穂うけ

原よりくくくをささる日

やんくをたく晴くすもくくくそくくくく
よきくくくくくく——法のそくくくく
障くくくくく先くくくくくくく
旅くくくくく——けくくくくく
江のり乃鳥り——法えくく——部——云
ちる道知日数おひきくくくく
え表のゆくくくくくくはくくくく
水くくくく志のひやりたり通——陽
明きの輝りり消くくくくく

巻きたるのさきよりそ 疾るわのさき
袖のさきや 庭木 離れこもるとして
痛うさくもあつて 早乙女の 掛ひたわ
ささたれや さきよりそ 海をききぬり

阿弥寺の安堵帝の像を拜して

障る物みずさくさく ぬれのさきうた
人こゑのさきと 痛うさく 印 抱き
高うりゆりさくさく ぬれのさきうた
お初めさき ぬれさきさき ぬれさき

目利 障のさきぬりのさき 痛うた
待合の人乃 進さく 輝のさき

楠州三日月とさきぬり

三日月とさきぬり ぬれのさきうた
おまや さきぬりさきぬり ぬれのさき
ぬれさきぬり ぬれさきぬり ぬれのさき
紙巻会や たのむさきぬり ぬれのさき
雨乞ひさきぬり ぬれさきぬり ぬれのさき
ぬれさきぬり ぬれさきぬり ぬれのさき

合歌さくらやたかきしるる家の後向
ほそ庭ふゆとの所他たり反後
之月や似てままたおひりきり
揚瀬の川多押やと船の秋
飯平居て坐の更さるる春と音
聖を菜のみそと澄んたりも乃川
河筋平ゆける所いそそ疎若か
おと月平家内そらふて生力魂
嵐尾草やぬき平七掛を折みり

はー近きくなく水や冬の間
落る日を大木平うけて平山鐘
はめられて平乃り後や草壳奏
送り火の比とおを毎の降みりり
大文字やをうけたらぬ火のやとり
日和中川うらやまのさうわらぬ
吹やえを比とかふはれはききか
本原や暮まふおひり信西り
空をうたおのすうつらや菜の花

五
菊の香や 陣とともかき中晴るも
行渡り月とて啼いとくう飛
るうと 粒中ゆか 友なりきうと
こぼしとて 多胃や 夢中二日月
す法音や 縁中たくとむこもち 扇
名月や 更とて 志とてきこものか 中
かろぬや 志とて 柱もたれ月の雲
待風をたるとも 何とて 月夜とて夜
かろ 庭の中 友とて 民のまらき

毛との 芝草とて せきとて 多や 縁角力
静すうと 庭とて 学や 后の月
庭草や うら日 枝とて 友の 鳴る
学う 法とて 中 髪とて 秋の 蝶
藪をたて 樹中 啼きや 秋の 蝶
初をや 通り ぶとて 大木 立
耳とて 毛友の けとて や 夢中 叶
枯とて 粒ゆとて 人なき 柳 一う 如

箱忌二句

夕ふましくはをりたちたう帰る花
時由縁や 阿しとをふふ海をうら
花をひつくり日中一雪うたう北の窓
うら能や 折しと丹の香を又あま
きのふやとあくと暇中付や冬之能
折をまをちや 歌中をうたふ
山葉花乃うさくちく咲花と木が
川上や 水尾平歌さす冬木立
ま— 海うらさす日の悠き枯花が

折阿とのみちや 枝もさのうた
葉の花や 阿しとをふふ人の門
氷仙や 葉乃またさく葉乃またさ
顔忍母や ぬけけとんま風のとら
ま鳥や ましく雪沙乃女阿うあ
忍冬ふ止のゆくとや ぬくとえとら
よとれさしとらとひのけしと 柳衣か
きのふれもまや 垣根のまて氷
す— 海うらと海まや 柳おくと雪

氷ゆえや積りけささるる夜の海より
降雪乃り日中もさるる氷のさる
川流りの岸ゆるゆるや流るる雪
老くむらゝに帰るるさる

それと何寸雪百乃り用を一年れ著

人の世に何事もやとてあはれむるはさるのさ
帰るるさるを流るる雪信をいさるる
何を香く風程の端の心をよせ亦葉乃
思ふささとと命をたるとりさるるこれ
年々にも佳良を我短赫はるる苦さる
秋の夜はさるるを流るるさるる鐘乃り
夢さるるぬ雪乃りたる一箇の焙芳乃り
雪の愛をさるるにさるる雪乃り立日の早き乃
あつた今年もさるる雪乃りさるる乃

退るるや流るる月乃りや貯るる雪
あつた流るる雪乃りさるる乃の雪
嵐高居士
松堂

道は實のちかひをたはる水廻て

侯府

掃一除乃阿むと春雪かたむる

兼室

心と交かぬの能くうし火抄石

茂精

毛の忘事かきる海乃市乞きん

申溪

初あふさくこすうふ雪乃降か

文窓

橙あか又市わらむし落

友招

竹香と毛刃をて眼醫若の冠本門

和南

砂こ水りかきる葉の味

雪山

一寸と大縁さしたけの蔭しあ

梅谷

盆乃すくくもせりかれてあは

佳山

大屋いり赤祥黄ひの捧突て

菊守

真素を物しそき乃阿り縁

綿巾

火をくそきし焼くかするの上

抱江

あ婦くやゆらまきちの鐘

鷺川

晴るやう雪の蔭く月の南

一峰

流又そくぬる能をくかち

霞嘯

五六 依穉小魚のこゝろ 末
 昌酒
 佛奴
 柴堂
 菜阿
 雨蓋
 二階のつゝとてそとを金とす
 貞秀
 梅枝
 身一 夕紗を穿て鏡にえら
 雨蓋
 喜風り強歩 咲城をうん
 ぬり〜とる者 物背の強
 初花も言得 顔の 小侍
 ぼろろ 水目〜川 蠟 七の若

荷水を備へて帰る 松造り
 初喜
 川枝
 赤瓢
 勢席
 富峰
 登龍
 拍子木をうす 水風名のゆえ
 先觸のまゝそ 冑の何るそ 家荷物
 神とむきこらして 強たはたか毛
 音形〜を降さ 吐るのこゝろ 安く
 夕末あり〜や 小ち〜ぬ 精進日
 土をうす〜のまゝ〜うら 向 物思ひ
 土城 下り〜 婦の 友やせ
 末東

釣柿ふ顔はめつきさ首の月
 梅里
 節の云さきり重兒新踏
 白翠
 端錦のし便り糸程鍾とそ
 後集
 陸臺石をむらふは遠く
 元外
 行雲とく粟津の方ふ消さる
 心星
 ひもふ折る屋根り啼き
 桂舟
 簾さる様招きあはの海に地
 具二
 笑ひくさされく落す雲掃
 文令

高山をくても温泉元い草の勢り
 玉臺
 ちんの月夜乃珍くく院
 月江
 仇名の多し糸瓜の葉とめそ
 桃溪
 わりり木枝持をよれと子福者
 居山
 何うたある十のの神内名
 素軒
 袖先をくく人て汐とさきさき
 香甫
 道う刃をえきくもちんそむ集
 文思
 寂う何くかえは人そむぬ
 徳女

旅一ちへり里々除掃一委之術

一友

車切らるる氷の片々よき

菊水

雨苗もゆるりとをふ並丸柳

東止

いすをくく地産のする所片

翠栂

淡紙のめく葉の價之志見是

扁風

姉らんそたる橋内操干

春泉

如才なき揚屋の男と一茶を

友山

此花の外り一夢をくくたふ

近女

面たれり一そよふ月の影ひり

一濤

かぬい片取みのたぐふ菊畑

琴女

たぐ居る七古左おを穿細細

芳林

みわくくそつこの時半陣以る

悟三

節事ふ意くくかえゆるたんが篠

^{少年}真太

くぐらる糍ふうせいの婦ききふ

勢三

く切ふ日野着人の旅切者

霞村

悦ひ恋ふれ 懐くのそく子加

竹莊

湯飲所の先爲縁へ滝へ

竹林

ささくし似るく磁石四くぬ

龍月

舌をうる水の板子の志く

可掬

あくけりくまき反く白著

文雲

此像のまきりく如く是の宿

祖心

きくあけりくまきりのかくま 暖

執筆

立りゆく縁をたれとをく

嵐高佛

くく葉をまきり 筒のまき葉

祖仰

今若く旅の土着をけく

由哲

一寸のまきりくまきりく古新口

萬古

暖字のくまきりく月のまきり

為山

裕り 丁度なるく流の冷

尾村

少石くまきりくまきりく 鯉番

抱義

浮連張りく木の因縁をく

等哉

橋乃釣のむらつきおき人々

西馬

こゝはたそよふ又やうりめはあ

氷毒

彌割毛ふりてやうり雪織おら

卓郎

けりあふりのちうくおき

見外

はひえる日海の曇り時

溪舟

平をゆきくえるふれんの電

之幹

不断居る中側の宿を障ふ白

尋香

すこ氷陰人おらるる山橋

青分

花散る月ちんくふ法輪寺

逸洲

睡りて海苔の白くおらるる

精舎

筑高志士三田忌退福

花氷少たよりとさきりや雲み鳥

溪高

筑高志士天祥忌を強生十六日

極群舎おれりて退福信さまた

うらやまらちりて何れを法の道なり

毒を流るるなりて

花のまやあはれおらるる終日

祖師

くるる日あり 陰より夕なり 是の時 由 摺
 ありぬの木の宵ふもれて 是の處 為 山
 草の戸や雉も 聲安く 来たる啼 途 流
 初秋や 是のころ ちかきも 市場り 尾 村
 出まへ くれと 寝も ちかきや 小 酒 集 山 子
 寒く けり 幸と 山と えて 菊の 花 菅 店
 たるう 之風 けり 幸と 集 羽 塚 之 不 染
 郭と 幸や ちかき 入る 幸と けり 見 外

雲 影の 水も 七と ちかき 秋 日 等 哉
 較と 啼と ちかき 寝入ぬ ちかき 夜 完 鴨
 今 片と ちかき 旅人 表 居る 交 氷 卜 早
 是 数と ちかき ちかき 平 せと ちかき 物 如 如 良
 人 何れと 家 あり 浦の ちかき 後 月 鳥 吟
 是 ちかき ちかき ちかき ちかき ぬ 梅の 花 菊 雄
 是 ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき 月 如 如 古
 是 ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき 西 馬

松陰ふ塔屋見よより交々き

尋香

汲阿片しわら水種うねるひらり

山記

落葉をく渡し軒をよまの鐘

柳雨

面くすま月の曇やとるの骨

二水

鳥木の影やゆきとねるうた

清雅

隣うらみ探して居る子やまの月

柳溪

濁りあうたんいそよき柳か

山松

人と結々くは志たふ啼一蚊か

拙城

きく見る花や梢の明いそき

氷壺

松りまる風の相をな浮麻鳥

素行

そ程の舞目立は梯の花

探筭

とりかてらふささく草蔭酒

龜行

川舟や瀬みある宵の行く子

懐父

鳴啼や松りまる急の何る夕

雨夕

ゆくれの似る夜もあはれそ郭云

五休

そーゆのれそりと嘆よ後うか

卓郎

くらくいのきりー入さう香登の形
 南々
 ひとくたおきーやきりーきりー人
 寄三
 夕見りりー家河の柳を喜の山
 香甫
 村を以て日を冬に流さくーか
 酉山
 穀中 みるれのかうたり喜水
 大笠
 空とちくまに影けり夕ゆく
 一儼
 次をり けりりー塚のり
 露明
 才小何 毛着れと角力取
 花外

半一と何る夜の明きりーきりー家
 氣成
 平かすけり 録をよきぬ火桶か
 護民
 ーり夜のきりやーのひるる畑けり
 雲水
 玄子
 啼 けりー葉のなれ陰や雉子の聲
 波目
 流すおほしや毛ぬくけりやきり流す
 茶瓢
 つかて日のさきやー少家乃候むら
 春湖
 降きりり 乾く我きやかき尾を
 月之
 まくくのひるるーりちのすきり
 未五

掛くはく水も僅合や苗代田

湘楚

これ差の乾く水も一と常一と

之 幹

うづかきく人をもくくや美の白

音 好

風何ものも勢や臨の浮く

雪 簪

もとの露も襟すこくも又波の如

白 玄

雪もや日よりつとくそ雪も静

冬 守

夏葉のりきり山口より吹く

北 松

くくく夜の雨よぬれたり掛く

新 苗

くや風を刀く葉も如き一橋本知

清 井

花乃何の世も実も葉の葉何の如

光 外

雪もや雪もよく水も数ものく

葉 所

何れも母もいそくぬあやわさる時

春 女

葉の雪もや立ぬくもく二三日

良 湖

潮つせも吹くも梅のふもく

美 宥

根も雪も此方をもくもく鐘の音

孤 南

露もくもく何れも寄葉も庭の如

新 可

花のりるや さらそをなくぬまにたりぬ
即と聲し 遠し 引のこるる 回重
鐘の強中林 さらばおろしせそ
初来たけを 乾くぬり 其の
うらみ 遠し ひとし 月
かゝく 程あり ゆきほ 一

一具
風 奇
具 奇
奇 具

新婿のる 替い けとる けり ます
よー ちきり けり ち 尊なり ますのせそ
錦をうり だそ 来そ ちう けり ち
高乃 志をうり けり 通す 風を 鋪
少味下を 形を けり けり 難ひて
けり けり せぬ けり 授けり けり
船の月すまの けり けり けり けり
そのけり けり けり けり けり

具 奇
具 奇
奇 具
具 奇
奇 具
具 奇

平造の海より柿むく椀の幅
多々種と仕立とこけり送り前
易きり入久り日ちあそ木の子降
川を金くさく告るえし付
手号のかりに付る飯遷生
やそく徳合ふ曲突の築久
又何いせうもふおくもき便
もくくくかひと娘引とる

具 舟 具 舟 具 舟 具

物やうのちくちくあつ猿四り
日々近けきと二つはくし文
啼く急のすれやうくぬ練を雀
換戎の満ちるしとれむれ
幸身の解少刺散家なまに
又ころとせれ奇き舞岐をくむ
のく敷きさくく月忍道
またかき畑の芥子とれゆく

具 舟 具 舟 具 舟 具

商人の先人其てまつをさうこうの

近江

砥山

吹ぬうらまきき月おや梅も年

皇都

梅通

世に秋舞きまをや春の雪

芥金

静まりて夜の子あけり花を

有節

雪をさく日影や梅の花や川

鳥谷

後め年一聖をよや暮る後の月

淡節

中流より似ぬ廣きや秋の花

公成

うらむらまきさう花の影をさん

枝月

砂舟りつまゆーて暮る柳花

浪花

鼎左

煙るを何そふ入りあぬのうえ

林曹

葉のまやまきたれおひく浪の浪

白鷗

船流や暮れそくもちぬうえ

素屋

鯛やたそえん交をわすれこえ

梅戸

可大

時行もよき思ふそすのうせ

紀伊

閑那

雪や啼ぬおぬるもそく

河波

風楼

若くはのまをさくさう角力取

茶雷

帝及月七淋ききを果す

土佐

古風

藤より先へくくや一人の氣

伊豫

雲外

是より行人とくえんをり出り

備後

菅原

之の古も海よりあり草の先

筑前

泰山

海山和一花の光や福子村

木

石外

降きより山をかくれて鳴る

宇

木舟

是もや氣ゆきくはれもたつて今

雨

宇遠

長束さの余りや門の志是枝

雨堂

由降一や草木を余り人かへ

根前

魚

初秋一やまより鳴る又まはれの隙

日向

双鳥

常々人地より毛着きた初かたを

甲斐

可轉

古きやゆ又冒の字の崩れ

信州

雲里

まはれや少一風何る庭の内

事

双柳

常々や此より後よきい物より

文

事松

かきや統一もそそくまの巻ひを

文叔

わの鶴や群のかしら水押

か賀

江波

流る月と雪乃志あやとの川

大夢

さう鶴やとくもすそ帝水鶴

柳壺

船とわいの伸る壺のすこ

越中

怒号

雪のこそい清けまもり裕

菱里

木こそそとせ忘るく追の雪刃を

雨梨

とく雪の清ひかしくや芸菜摘

越後

乙良

雪の下もさきまてて冬の石

鷺眠

枝を折鶴や雪のお中

西晴

水辺より向人そぬく袂うね

五瓢

鳥のそと鶴やさる信や落るすそ

葉山

忍る人ふ流るる雪とや後の月

出羽

津風

文月や扇むらひしあさの門

陰風

草鞋とくうし流る燃る蚊並

素山

や何して石を踏むとくそそふ

氷竹

垣のきりぎりすや二日の月

久業

柳也 柳をさぐり けうき 柳の枝

緑峰

明也 柳をさぐり 柳の枝

川澄

中何う 此日の古のつ 藤の花

陸奥

多よ女

又も 藤をさぐり 柳の枝

清氏

常也 年のよきとて 柳の枝

春高

夜も 夜をさぐり 柳の枝

尤し

春也 春をさぐり 柳の枝

六槐

壁も 壁をさぐり 柳の枝

布山

柳也 柳をさぐり 柳の枝

梅二

春也 春をさぐり 柳の枝

精器

日也 日をさぐり 柳の枝

峰女

名月也 名月をさぐり 柳の枝

源阿

杖也 杖をさぐり 柳の枝

禾月

毛也 毛をさぐり 柳の枝

文人

雪也 雪をさぐり 柳の枝

五雲

さか 柳をさぐり 柳の枝

宗古

初雪もふりぬるやまの月
梅仙

初雪もふりぬるやまの月
一止

初雪もふりぬるやまの月
梅史

初雪もふりぬるやまの月
一叟

初雪もふりぬるやまの月
舍用

初雪もふりぬるやまの月
霍采

初雪もふりぬるやまの月
友甫

初雪もふりぬるやまの月
友甫

初雪もふりぬるやまの月
霞雪

初雪もふりぬるやまの月
未成

初雪もふりぬるやまの月
柳塘

初雪もふりぬるやまの月
柘里

初雪もふりぬるやまの月
函舟

初雪もふりぬるやまの月
景文

初雪もふりぬるやまの月
寒莫

暮か梅の夕暮清くもあまらば
 立時の多きを知らば 稲はらぬ
 初雪も くるりようかむ伊勢の海
 風の音もくわくか又わのほのね
 庭掃いてそはかりやぬ猫の意
 昔むく床し又杉や 花の中
 心市や柳くく落涙も 野の音
 幸直也 野分の音のり 瀧の音
 士明

暮か梅の夕暮清くもあまらば
 立時の多きを知らば 稲はらぬ
 初雪も くるりようかむ伊勢の海
 風の音もくわくか又わのほのね
 庭掃いてそはかりやぬ猫の意
 昔むく床し又杉や 花の中
 心市や柳くく落涙も 野の音
 幸直也 野分の音のり 瀧の音
 士明

扱すりてさるる事一和や芦原風
 山吹や如眉の絵をぬくく其
 中まも聖を皆中深姫のこころ和
 舞一揚はく聲一まゝを在和
 以るまゝりりさ守娘やこころ和
 是る人何すかき物よ是中事
 江の水一一段高又清く和
 春よりさ人淋一まゝ行く若の如

木公
 渡来
 相鳴
 竹倉
 冥市
 米室
 菊西
 貞秀

現り毛影く心花乃古うまう如
 ありのや一常かかゝに若乃去る
 殊更り一秋のりくれを阿さるる情
 文月や浮世を峰峰一信の
 春一まゝりて若子のさきや一和
 以るまゝりて言をうて禁較を和
 終日たをてまゝりて秋のさきく和
 雪の實りてさるる事一と渡り

年雄
 珠水
 良高
 五好
 柴成
 松糸
 有来
 一舟

花の母を流るる舟のかのこころ

群雨

いよと世をこころ流るる舟のかのこころ

花梅女

友山や常はるる舟のかのこころ

末賀

もろくそいよと流るる舟のかのこころ

いよと

芝舟を平白く舟はあつら

岱峯

山風りそ花をくさの雪や

其之

積教り何たかめきや花屋

巴祝

ちよ梅を平白く舟はあつら

梅生

舟を流るる舟のかのこころ

梅車

物言のかくれやまろん蘇の志

岳高

舟ちあやまろん蘇の志

梅里

そ花を流るる舟のかのこころ

如仙

舟ちあやまろん蘇の志

鳩麥

人の舟を流るる舟のかのこころ

竹畑

さきさきや雨ふも何れは嘆きまふ

由誓

垣よりかきこり福ささる帝

嵐斎

刺し込み指乃衣の直をわけて

誓

そくそり乾く袖のぬくもり

高

管阿あて取けを時を急ぎ月

誓

朽くとも存ふ心あはれ

高

のひさし古角力の所傳のうす使

誓

色中法華へたのむそあはれ

高

はらめりの意をえりて仲のよき

誓

筆とて事あらとも苦ふせぬ

高

垣えきし詔巴く墓をたふぬのぬ

誓

竹のの影のほくく小堤

高

生ぬるの意あふむる考気掛

誓

かうこむる旨り早い敷の聲

高

月影ささる去の机うすめそ

誓

見廻りせぬし大土のほく

高

立無ふ村は古き花乃うらひし
ハナハ花すたふこそくく何ひ
化くせくきりねくく餅餅
たんえそくき拂ひあぐい金の利
神地の外乃平今まらるる
湖まへむけくき目鏡える
くくあまきくくゆのかまき
あ保ひをきくく葱乃物野菜

其 高 其 高 其 高 其 高

蕪毒の下りくくくの道か浅
四子ま歩行たくくくひきりあ
よくくける休の細き花新き風
かく例くくく寺乃門前
やうくくくくく月のかまき
油り志はる本乃實をくく
着通く北海浴衣の垢しそ
ひくくく後りいそくくくぬ

其 高 其 高 其 高 其 高

ほろろと入すく静まらぬ市の灯
造地古く菜をまきくふと鳥
ひすのちをり一果酒をくくは
何くす一摘一玉の菜をまき

高 老 鳥 草

文より寂れ又よき燈籠か
地りもまきくゆきもつぬ柳か

凱山 女翼

海より降るくくぬききの家
川神より居るくくまむ柳うね
何くすもりのさす玉の香をうね
何の香も一留てまきくも母が
水音の響り一もたきく光る電
菜の玉やくくくもまき海の音
あまのすせありくくくもまきの音
静さの命もまきくゆきくうね

雲岳 竹雨 美山 湖松 半菰 平山 栲古

竹更切根もまゝ一かきや海の面
 下船や けこねくしにき乃糞
 とらうや 牡丹のわらやあま家
 般もーらや 流くひさるの夕より
 力あきくろねの麻や 雪の道
 花守や くろく 持夜の気守那
 雨は阿も 花もまかぬまきくら
 雨さくくくくくくくくくくくく
 後集

松並をまきそ 塚家乃柳うね
 常法師や 笈のまねねと
 雪よりえ海のくもくやあま家
 友を寝たり 花もまかぬまきくら
 夕そくくにまのねもみすきくく
 家おくや 花守もたねのこねれ葉
 きくた戸おけ 氣の居るあまうね
 くむ水より 氣のええたり本道集

掃^りぬ^る袖の^きや^も花の^雪
採花女

麦秋や^むら^の白の^高山^の
むらさ

是^れ柳^の刺^のの^竿や^和河^の
柳庫

又^は胸^をと^り旭^のを^子峰^や郭^公
田角

く^もむ^交に^おけ^けけ^けけ^けけ^け
竹林

学^らし^又陰^をえ^もく^らち^筆
涼竹

一^たん^を吹^まれ^のく^あの^雪
其得

行^まち^やら^るく^一羽^守山^の
龜友

家^はと^あら^け押^をり^れぬ^き婦^の和
又雪

秋意

静^りす^もる^もの^あや^何の^夕柳
葉室

嵐^高鳥^生の^高後^を今^碑あ^ふ
吹^くか^祥鳥^をい^やか^けま^い
申^も又^まを^を申^しり^し

も^あを^もく^くの^中や^藤の^所
友松

少^飲り^いま^そ手^向ん^まの^露
申溪

吾^もあ^らし^くも^りお^もす^も新^法師
葉室

松風をいへばささくささくささくささくささくささく

梅谷

晴きよのうららかなるのうららかなるのうららかなる

きく守

ささきかきかきかきかきかきかきかきかきかき

繪川

ひらひらひらひらひらひらひらひらひらひらひら

綿袋

おつらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

文令

松風をいへばささくささくささくささくささくささく

月江

輝の葉や枝の葉や枝の葉や枝の葉や枝の葉や枝の葉

昌海

以風をいへばささくささくささくささくささくささく

一録

けしきりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

素軒

ちかきやそのちかきやそのちかきやそのちかきやその

霞嘯

ささきりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

佛奴

しきりのちかきやそのちかきやそのちかきやそのちかき

挂舟

雪の聲にささきりりりりりりりりりりりりりりりり

一濤

初花やその初花のうららかなるのうららかなるのうら

一友

ささきりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

一峰

ささきりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

抱江

廿七

江戸の廊前 ふぬく流きききき

多き人ふくくくかちきり孫生き

きつえやうねときりけりまきの居

互の保あかりまき人まきのま

橋脚 舎の主人

去りのそりまのうけり

こゝろ 孫生中 のま

馬福の法蓮より 額きりて

まきりゆえにけりけりのゆききり

佳山

雪山

和南

茂精

馬福の法蓮より 額きりて

まきりおまきりけりのゆききり

文窓

今年一七文三圓大祥忌

孫生中の六日ゆききり

そとまきり孫生をまきりて

まきの橋と橋をまきりて

松堂

安政三年文月

楮橋舎波撰
牛友懐父書

十

